

日本の職人技・横浜家具

ホテルニューグランド本館は横浜市歴史的建造物に指定されています。シンプルで重厚な建物ではありますが、アール・デコ調の優美な曲線が、全体の印象をやわらげています。

設計は渡辺仁。彼は後に銀座の和光（旧服部時計店）や東京国立博物館なども設計することになりますが、この時はまだ38歳。新進気鋭の建築家でした。

カフェの明かりが洩れる角に立ち、壁の上部を見上げてみましょう。そこにレリーフがあり、「AD 1927」という文字が刻まれています。1927年（昭和二）、ニューグランドが誕生した年です。

現在、回転ドアのある場所に、もとはホテルの正面玄関がありました。



一步入ると、目の前に濃紺の絨毯じゅうたんを敷き詰めた階段が現れます。ところどころに青い霧を吹き付けたようなレトロ・ベージュの手すりは、イタリア製のタイル。絨毯の色はこのホテルのいたるところに使われている「ニューグランドブルー」です。

ニューグランドを訪れたことのない人も、写真や映像で何度か、この有名な階段を眼にしているのではないのでしょうか。喜劇王チャーリー・チャップリンが付け髭のない素顔で、野球王ベーブ・ルースが子供のような笑顔で、若き日の石原裕次郎が押し寄せるファンから逃れて、着飾った舞踏会の客達が、純白のウェディングドレスをまとった花嫁が……そう、どれだけの華やかなドラマがこの階段を上り下りしたことでしょう――。

緊迫したドラマ、切ないドラマも、もちろんあったのですが、それはまたあとで――。

階段の上はロビーです。フロントもここにありました。こうした造りを、イタリア・ルネサンスの建築様式で「ピアノ・ノビレ（高貴な階）」と呼ぶそうです。

豪壮な邸宅では、大きな窓があつて日が明るく差し込み、しかも静かで眺めが良い

二階に、応接間などの重要な場所を置いたといえます。

「昔は外国人のお客様がほとんどでした。外国航路の船が横浜港に着くと、そこからまっすぐニューグランドへいらっしゃるのです。船だから、荷物は大きなトランクを何個も持ち込めます。エレベーターなんてものは使いませんよ。ボーイ達は重いトランクを持って、この階段を一段一段上がったのです」

ベテランのスタッフが、懐かしそうに語ってくれました。

階段を上がりきった外国人の客は、そこでみんな眼を見張り、溜息を漏らしたそうです。ホテルという西洋建築に、見事、調和した東洋芸術の粹——。

まずは階段正面の壁上部に、飛翔する天女を描いた半円の綴れ織りが出現します。高い天井から下がっているのは天平様式の吊り灯籠型ライト。ロビーを右手奥に入ると、壁のブラケットのひとつひとつに、琵琶を奏でる弁財天が浮かび上がります。

インド風の美女が舞う石膏のレリーフもあります。あまりに艶っぽいので、米軍の接収中、将校が持つて行こうとした、というエピソードも残っています。そのせいか、ちよつと目立たないところにあります。目線を上にして、よく探してみてください。

絨毯も、たっぷりとしたタツセルのついたカーテンも、色はもちろんニューグランドブルー。日が暮れると舗道のガス灯がともり、窓外の銀杏が淡いレリーフのように浮かび上がります。

でも、このロビーの華はなんといっても家具です。ここにある椅子、テーブル、ソファの多くが、開業当時に特注で造られたもの。他ではめつたに目にするものがない。「横浜家具」と呼ばれるクラシック家具なのです。

横浜にはたぐさんの「日本ではじめて」がありますが、洋家具もそのひとつでした。横浜に洋館が建ち並ぶようになると、必然的に洋家具の需要がでてきます。でも革や布を張った家具、脚がカーブした家具などは、日本にはないものでした。

日本の家具職人達は、まずは外国から持ち込まれた洋家具の修理から始め、形、意匠、それを造る道具の使い方などを、ひとつひとつ覚えていったのです。

元町にはクラフトマンシップ・ストリートと名付けられた通りがあります。本通りから一本、山手側へ入った通りです。その名のとおり、ここにはたぐさんの職人が住み、彼らの工房がありました。その多くが家具職人で、馬具職人や宮大工から転身し





た人が多かったようです。

一口に洋家具と言っても、国によって様式が異なります。日本の職人達はすべての様式をマスターしたばかりか、そこへ日本の技術とオリジナリティーをくわえました。そうして誕生したのが横浜家具と呼ばれるものです。

残念ながら関東大震災や空襲で、横浜の洋館などにあったものはほとんどなくなりしました。ニューグランドに残された横浜家具は、空襲を逃れ、今日まで大切に守られてきた貴重なものです。布を張り替え、毎日、ていねいに磨かれています。

中央に円い^{まる}レリーフのある新聞掛け、三人掛けのゆったりしたソファ、肘掛けが外側に向けて大きく広がった一人掛けソファ、半円形や長方形のテーブル、マガジンラックも横浜家具です。

アームの先に天使の顔をあしらった椅子はキングチェア、カーブしたアームの先が牡羊の角のように湾曲した椅子はジャックチェア、布貼りの一人掛けソファのうち、背もたれが高くまっすぐ伸びているものはクイーンチェアと呼ばれています。

そっと腰掛けてみましょう。繊細な彫刻に手を触れてください。過ぎ去った「時」



があなたをそっと抱きしめてくれるでしょう。

元町にも、横浜家具を継承する「ダニエル」という老舗の洋家具店があります。そこでのおもしろい話を聞かせていただきました。

終戦直後の、物のない時代。横浜に来た外国人は「横浜家具」をたちまち気に入る、ことに安楽椅子を欲しがったそうです。けれどもそれに貼る上等の布が手に入りません。

そこで思いついたのが着物の帯です。食料や日用品を手に入れるため、女性たちは大事にしていた帯を売りました。これを安楽椅子に貼って見たところ、幅がぴったりに合いました。

きらびやかな絹の帯を貼った安楽椅子は「オビ・チェア」と呼ばれ、外国人に絶大な人気を誇りました。いまでも海の向こうのどこかで「横浜の思い出」として大切にされているに違いありません。

ニューグランドに來ると、必ず立ち寄らずにいられない本館ロビー。この空間に漂うただならぬ静謐せいひつには、何度來ても圧倒されます。いまや都会のホテルは、どんな高級ホテルであれ、気軽に入れるようになりました。でもわたしにとってここは別格です。1927年からいまに至るまでの時間が、どこかへ押し流されることなく、ゆっくりと回遊しています。

ニューグランドにはわたしの好きなものがいろいろあるのですが、筆頭はこの、「時の気配」かもしれません。

その「時」は、横浜を襲った大きな震災の後に始まりました。横浜市民がこの悲劇から立ち直るためのシンボルとして、ニューグランドが建設されたのです。

そのいきさつを、ホテルの会長である原範行さんから聞かせていただきました。